

## 時は金なり、か？

石 川 立

奨励者紹介〔いしかわ・りつ〕

同志社大学神学部教授

〔研究テーマ〕聖書の神学的・哲学的解釈、解釈学、教父学

「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。それで、受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにすることは。』主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

（マタイによる福音書 20章1―16節）

### 聖書を読むことと研究すること

6月の終わり頃から大変な暑さが日本を襲ってきていますが、これは気候のせいばかりではなく、ロシアで行われているサッカー・ワールドカップで日本中が熱くなっていることも、ひょっとしたら原因しているかもしれません。

目下、ワールドカップでは決勝トーナメントの第1回戦が行われている最中ですが、周知のとおり、世界ランキング61位の日本チームは昨日の午前3時から、世界ランキング3位のベルギーと対戦し、惜しくも2対3で敗退しました。

普段は深い眠りに入っている午前3時という時間帯ですけれども、眠い目をこすりながら熱く応援された方も、中にはいらっしやるかもしれません。

さて、今朝は、「今さら」と思われるかもしれませんが、聖書の読み方について、改めて、一緒に考えてみたいと思います。

大学のいわば構成員として大学という学問の場にいますと、聖書を読むということがなかなかできなくなっていると感じます。私は聖書学を一応、専門としていますので、聖書の研究はします。聖書解釈もします。しかし、案外、読むという行為はしていないような気がしています。

では、「読む」ということと「研究する」ないし「解釈する」ということとはどう違うのでしょうか。

サッカーにたとえて考えてみます。「読む」というのは、相手側のテキストとこちら側の読者とが正々堂々と相まみえ、熱く対戦するということだろうと思います。テキストが勝つのか、読者としての「私」が勝つのか分からない緊張感の中で行われる行為です。

「研究する」とか「解釈する」というのは、相手のテキスト側は10人とゴール・キーパー1人ですが、それに対して研究者側・解釈者側は、10人とキーパー1人のうえに、さらに3人ほどのキーパーを加え、守りをしっかり固めて戦うようなものではないかと思うのです。負けがないのです。テキストと向き合うことによって、こちら側が壊されるとか、生き方が変わるとか、人生観にひびが入るとか、考え方やモノの見方が問われるとか、そういうことがない。「俎上の鯉」という言葉がありますが、聖書をまな板の上に置き、自分は安全なところにて、相手を一方的に自分たちの料理法で料理する、自分たちの方法論で分析する、これが研究であり解釈なのではないでしょうか。

他方、「読む」という行為のほうは、これを本気ですれば、読者のほうが壊れるということもあるかもしれない。その生き方や考え方が問い直され、変えられる、ということが起こるかもしれないのです。ある意味、非常に危険な行為だと言うことができます。

### 概念メタファー

先ほど読んでいただいた聖書の箇所を、今日は一緒に「読んで」みたいと思いますが、その前に一つ、皆さんと共有しておかなければならない学説があります。

もうずいぶん昔のことですが、レイコフとジョンソンという二人のアメリカの学者が、“Metaphors We Live By”、日本語訳ですと『レトリックと人生』という題名の画期的な本を出版しました。原本は1980年、日本語訳は1986年に出ています(大修館書店刊)。

私たち人間には、抽象的な事柄、人生とか心とか愛とか時間とか、「それは何か」と問われた時、「うーん」とうなってしまっただけで答えられない事柄がたくさんあります。そのように分かりにくい事柄を理解しようとする時、私たちは慣れ親しんでいる概念をそれに結び付けて理解している、とレイコフとジョンソンは言います。つまり、私たちはメタファー(隠喩)を使って抽象的な事柄を理解するのだと言うのです。たとえば、「人生とは何か」と問われたら、それはあまりに漠然としていて何と答えていいか分からないけれども、「人生は旅だ」というふうに、「人生」に「旅」という概念をくっつけてメタファー(比喩)を形成すれば、人生が分かるような気がするのです。お母さんの膝元を出発し、学生生活を通り過ぎて仕事の道を歩み、死という目的地にたどり着く、これが人生であると理解できます。あるいはギャンブルの好きな人には、「人生はギャンブルだ」という方がぴったりくるかもしれません。人生はAにするか、Bにするか、あるいはCにするかという選択の連続であり、何か保証があってどれかを選んでいくわけではありません。人生は確

かにギャンブルです。このようなメタファーの例は挙げればきりがありませんけれども、これらをレイコフとジョンソンは概念メタファーと呼んでおり、これらの基本的な概念メタファーに基づいてさまざまな日常表現も誕生してくると指摘しています。「人生は旅だ」という概念メタファーからは、「山あり谷ありの人生だった」とか「人生という長い道のりを共に歩く」などなどの自然な表現が生まれてきます。

「時間」も捉えがたい抽象的な事柄なので、「時間は空間だ」とか「時は金なり」などの概念メタファーによって理解されることになります。そして、これらの概念メタファーからいろいろな表現が出てきます。たとえば、時間には本来、長さはありませんが、「長い時間」とか「短い時間」と日常的に言います。「時間は空間である」という基本的なメタファーが私たちの考え方にすっかり根付いているので、それに基づいてそのような表現が可能になってくるのです。また、私たちは、「時間を無駄にした」とか「時間がない」とか「時間を使う」とか言います。これらの表現はごく自然な表現ですが、それは「時は金なり」という概念メタファーが私たちの頭の中にあって、それに基づいて出てきた表現だからです。

まず基本的な概念メタファーが私たちの頭の中にしっかり根付いていて、それに基づいて私たちの普段の馴染みの表現が出てくるわけですから、これら概念メタファーが私たちの考え方を規定し、支配していると言うことができます。私たちは基本的メタファーに基づいて物事を理解し、自然な表現を用い、日常生活をスムーズに過ごすことができています。それは実に便利なことなのですけれども、しかし他方で、私たちは概念メタファーに支配されてしまっていて、他の見方をすることができなくなっているということでもあります。自由な発想を失うということにもなっているのです。

「時は金なり」という言葉は、アメリカ合衆国の独立に貢献したベンジャミン・フランクリンが最初に言ったようです。資本主義の精神を表わした言葉です。フランクリンは18世紀の人ですから、18世紀のアメリカですでにそのような概念があったということになります。

21世紀を生きている私たち現代の日本人も、実は「時は金なり」という概念メタファーのもとにあります。が、そのことをあまり意識したり疑ったりすることをしません。私たちは、時間は大事だと考えています。なぜなら、ある時間働けば、お金になるからです。「時給いくら」というのが、皆さんがアルバイトをする時の一番の関心事ではないかと思います。ぼーっとしては損だ。「時は金なり」。時間を無駄にしてはいけません。私たちは効率性に価値を置き、時間を経済的に評価します。

時間を即物的なものとして考え、殺伐としたものとして捉えて、それ自体を豊かなものとしてはあまり考えないようにになっています。時間に追われたり、時間を無駄にした、失ったと焦ったりしています。忙しいですね。私たちは「時間を生きる」とか「時間を楽しむ」というような感覚をもちやもっていないのではないのでしょうか。「時は金なり」という概念メタファーにすっかり支配されているように思われます。

### 「時間」をめぐるたとえ話

前ぶりが長くなってしまいました。今日の聖書を読んでいきたいと思います。

「時は金なり」は18世紀のアメリカ合衆国で出てきた考え方であると先ほど申しましたが、時間とお金の関係は普遍的にしっかり結びついているようで、今日の聖書の箇所でも「時は金なり」という考え方が背景に見られます。

今日の聖書の箇所は、イエスが弟子たちと共にガリラヤ地方からエルサレムに向かって行く途中で話さ

れたものだとされています。イエスは「天の国」について、たとえ話で話されました。

話としては分かりやすい話です。全体の意味はともかく、分かりやすく語られています。

先ほど朗読していただきましたが、もう一度これを味わってみましょう。

ある家の主人が、自分のぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけていきます。仕事が具体的にどのような仕事なのかは書かれてありませんが、12節に「まる一日、暑い中を辛抱して働く」と書かれているので、熱中症の危険を伴う強い日差しの中、辛抱して働かなければならない、きつい仕事のようなのです。主人は「一日（たぶん午前六時から午後六時まで）一デナリオン」の約束で、労働者をぶどう園に送ります。一デナリオンは、当時の平均的な一日の労働賃金に当たります。さて、人手が足りないようで、こののち午前九時にも、広場で仕事の口を待っている人たちがいたので、4節「ふさわしい賃金」を約束してぶどう園に送ります。さらに主人は、十二時、午後三時、そして日没前の午後五時にも、この日仕事に行けないでいた人たちを同じようにぶどう園に送ります。

夕方になって仕事が終わると、主人は監督に「労働者たちを集め、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順番に賃金を払ってやりなさい」（一部私訳）と命じます。「最後の者から」というのがこの物語のミソです。まず、午後五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取ります。最初に雇われた人々がこのことを知り、自分たちは長い間働いたので主人からもっともらえるだろうと思いますけれども、渡されたのはやはり同じ一デナリオンでした。この人たちは、お金を受け取ると主人に不平を述べます。

「最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとはいえ」。

主人はその一人に答えます。「友よ、あなたに損はさせていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしてはいけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか」（一部私訳）。

この言葉を主人はどのような調子で言ったのでしょうか。「ひどい主人だな」と皆さんは思うのでしょうか。聖書を読む時は、発言の調子なども想像しながら読んでいく必要があります。主人は、威厳をもってそのように言ったのでしょうか。わがままを通す暴君のように高圧的に言ったのでしょうか。やさしく諭すように言ったのでしょうか。ちょっとずるそうに、ウインクでもしながら言ったのでしょうか。皆さんは、どう思われますか。私は、このたとえ話では、主人は一人の人に親しく「友よ」と呼びかけているので、時間をかけて、ゆっくりと、ゆったりとやさしく諭すように言っているのではないかと思います。

さて、このたとえ話は、どう思われますか。分かりやすい筋の話ではありますが、一時間ほどしか働かない人と十二時間、辛抱強く働いた人とが同じ給料とは、これは奇妙な話です。

朝から働いている人たちが不平を言うのは当然です。とくに器の小さい人たちとは言えません。昼から働いている人たちも不平を言って当然です。一方、五時から働き始めた人は、「得をした」と思ったのではないのでしょうか。

読む私たちは誰もが「これは不公平だ」と思います。「この主人が気前がいいのはよいとして、それなら、朝からずっと働いてきた人たちにもっとお金を渡したらいいのに」と思います。

この話の主人は神を表しているように思われますが、そうだとすると、なおさらこの話は奇妙です。天の国では、神は長く辛抱強く働いた人たちを不公平に扱われるのでしょうか。

### 恵みの時

どの読者も、たとえ話に登場する労働者と同じように「この話是不公平だ」と感じると思います。しかしそれは、私たちが「時は金なり」という概念メタファーにしっかり支配されてしまっているからではないでしょうか。私たちが不公平を感じるのは、時間は測れるもの、時間には長さがある、量がある、時間は数えることができる、そして「時は金なり」というふうに、私たちが時間を即物的に、経済的に捉えているからではないでしょうか。

不平を表明する一人の労働者に主人は1対1で向き合い、「友よ」と親しく語りかけます。ゆったりと、ゆっくりと、「殺伐とした冷たい時間の観念」をあたたく溶かすように、深みのある豊かな声で語ります。この声は私たち読者にも直接響いてきます。

主人の声は、私たちを支配する時間の概念、「時は金なり」という私たちの中にある概念メタファーを壊します。このたとえ話は、読者を縛る概念に挑戦する話でもあると思います。読者に不公平感を感じさせ、読者を混乱・困惑させて、読者の中にすっかり巣くっている既成概念にひびを入れ、主人の、つまり神の声を読者の中心部にまで届けます。

読者が主人から直接語られている「時・時間」は、実際には読者が主人の言葉を読んでいる「時」ですが、それは、効率性に矮小化した「時間」を超え、読者自身が主人つまり神に出会える「時」であり、神の配慮につつまれた「時」にほかなりません。

私たちの命を殺伐としたものにする時間概念から私たち読者は解放され、「時」の本当の大切さ、出会いの恵みの「時」、神が直接祝福してくださる「時」の中に置かれます。

確かに、私たちの実生活は「時は金なり」の概念のもとにあります。「時給いくら」の世界に私たちは生きています。これは否定することはできません。

しかし、聖書の読者として、私たちは主人の声を聞き主人と出会うことによって、そのような功利的な時間とは違う「時」のあることに気づき、心静かに祈り、そのような「時」の与えられることを、感謝をもって味わうべきかと思います。

2018年7月4日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録